

## 第 11 講 「存在の連鎖」 史の結末とその教訓

この講義では、まず西洋思想において二千年にわたり一ライバルがいなかったわけではありませんが一支配的であり続けた、形而上学的神学の概念の形成から始めましたね：その着想はまず明確に、プラトン『国家』『ティマイオス』で表現され、ネオプラトン主義者たちにより拡張および体系化されました。そして講義の最後としては、形而上学的神学の歴史におけるあるフェーズについて語りましょう。

プラトン主義のしつこい影響がもたらした最も顕著な影響は、歴史の相当部分を通じて、西洋宗教の哲学的な形態は 2 つの神を持っていた、ということです（同様に、それほど哲学的でない形態では 2 つ以上の神がありました）。確かにその 2 つというのは、1 つの存在が 2 つの側面を持つものとされてきました。しかしそうした「側面」に対応する観念は、相反する 2 種類の存在についての観念でした。

片方は、異世界の絶対者のものです—自足し、時間の外にあり、一般人間の嗜好や経験のカテゴリーとは異質で、己の永遠の自足した完成を補ったり拡張したりするような、劣った存在の世界など必要としない存在です。

もう 1 つは、まったくもって自足しておらず、どんな哲学的な意味でも「絶対」などではない。その本質的な性質は、他の存在があることを必要とするものであり、しかもその他の存在は 1 種類ではダメで、現実の可能性の中で次々に下がる位階の中に居場所を見つけられる各種の存在が必要だったのでした—その神さまの一次的な属性は生成性であり、その顕現は生物の多様性に見出されるものであり、つまりは世俗的な秩序と自然プロセスの多様なスペクタクルにその神は顕現するのです。

何世紀にもわたり、この 2 つの着想の相反性を隠すのに使われてきた仕掛けは、『ティマイオス』の簡単な格言でしたが、それがひねくりまわされて流出説の根本的な公理になりました—「善」は「嫉妬」から自由でなければならず、より完全なものは「それ自体の中にはとどまらずに」、必然的に完全性の低いものを宿す、あるいはそちらにあふれ出るのだ、という考えです。この仕掛けは、役には立ちましたが、実は 2 つの観念の矛盾を克服できていません。しかしその有効性は、人間の頭には（いかに根拠レスとはいえ）自然に思えてしまう因果関係についての思いこみと、一見するとなじむように思えるために高まってしまうました。その思いこみとは、「低いもの」は「高いもの」の派生物でなければならないということ、原因は最低でもその結果に劣るものであってはならない、というものです。この神学的二重性にともなう—というのもこの神の観念はまた最高善の定義とも解釈されたのですから—やはりこれまで見てきたように、価値観の二重性も続きました。1 つは異

世界的なもの（とはいえしばしば中途半端ではありましたが）、もう 1 つはこの世的なものです。もし人にとっての善が神の黙想または模倣であるなら、これは一方では単なる「自然の」関心や欲望の超越と抑圧を必要とします。つまりは「世界」から魂を隠遁させて、それを聖なる完成という美しいビジョンに向けて整えねばならないのです。そしてもう一方では、ありのままの物事の神に向けた敬虔さも必要とされました。ありとあらゆる多様性を持つ近く可能な宇宙に慈しむ歓びを抱き、人間としてそれをますます完全に知って理解しようと試み、創造という聖なる活動に意識的に参画しなくてはならないのです。

この二重主義の 2 つの要素の分裂については、すでに 18 世紀の事例をいくつか見ましたね。充満の原理の論理そのものが、異世界的な神の模倣は、そんな神がいると想定したとしても、人間はおろかどんな生き物の善にも成り得ないという結論を宿していたのです。なぜなら、神の理性または善性が、不完全な存在のそれぞれの位階がその個別の種類の後存在することを強いてしまうからです。そしてその横では神のアイデア自体が圧倒的にこの世的になりつつあり、「自然」の概念との融合に傾き、その表現も無限に多様となり、各種の異なった存在の生産において果てしなく活発になっていきました。私たちの目下の考察事項はこの後者の傾向の集大成です。存在の連鎖—言い換えると創造された宇宙すべて—が明示的に、もはやそれ単体で完全であり、その構成要素の種類において永遠に同じものとしてではなく、充満と卓越性の度合いが低いものから高いものへと次第に発達するものとして見られるようになると、永遠に完全で不変の神がそんな宇宙において顕現したと想定できるのか、という問題が避けがたく生じました。この問題は必ずしも、あるいは最初から、ノーという答えにはなっていませんでした。いくつかには触れましたが、常に同じで常に絶対理性の同じ必然性に基づいて行動する創造主（この創造主は、ある時点で別の時点とは異なる被創造物を生み出せません）への信念を、拡張して進歩するこの世界が、ある時点と別の時点では本質的にちがっているという主張と組み合わせようという試みは、18 世紀には無数にありました。この後者の見方では、時間の中の事象の全般的な秩序は、有限な存在の無視できるような特徴ではなく、形而上学の取り組むべき者の永遠の側面とはまったく関係ないものなどでもなく、むしろ哲学にとって深遠な重要性を持つ、現実の一側面なのである、と考えました。この 2 つの信念がまとまっている限り、私が言及した公理らしき代物—つまり因果プロセスにおいては、先行するもの（先件）はそこから生じるもの（後件）よりも少ないものは含むことはできないという主張、高次の存在は低次の存在から生まれることはできないという主張—は、まだ危なっかしい形とはいえ維持できました。しかし 18 世紀が終わり、19 世紀冒頭の数十年で、こうした伝統的な神学や形而上学の前提は逆転されはじめました。神自身が世俗化/時間化されていったのです—神は実際、創造がゆっくりと痛々しく可能性の位階を登るプロセスと同一視されたのです。あるいは、その位階の頂点を指すものとして神の名を温存するのであれば、神というのはそのプロセスの未だ実現されない最後の部分として着想されました。したがって流出主義と天地創造主義

は、過激進化主義または絶対進化主義とも呼ぶのが最もふさわしいものに置きかえられたわけですね—これはつまり、典型的なロマン主義的進化主義であり、ベルグソン『創造的進化』はおおむねその焼き直しです。低次のものが高次のものに先立つのは、有機形態や機能の歴史においてだけでなく、普遍的だとされました。原因の中に含まれたもの（実現されない抽象的な潜在性として含まれているものは別ですが）よりも、その結果に含まれたもののほうが多いのです。

この展開が最もよくわかるのはシェリングです。1800-1812年の哲学的考察では、確かに彼はまだ2つの神を持ち、したがって2つの宗教を持っています。片方は時間を超越して永遠に完全な絶対者、「同一性の中の同一性」、新プラトン主義の「一者」です。そしてもう1つは苦闘する、世俗に制約された、次第に自己実現を果たす世界精神または生命力です。後者は、前者が私たちに対して顕現するときの側面です。その顕現においては、充満と連続性の原理が支配します。世俗的な秩序は、言わば絶対叡智の投影、広げられた映像のようなもので、その具体的な中身は連続した生命体とその状態で構成されるのです。そしてこうした継続はすべて、シェリングによれば、次第に傾斜のつく序列を構成しなくてはならないのです。その理由は以下の通り：

継続そのものは徐々に起こる。つまりそれは、何かある単一の瞬間にすべてが起こるようなものではありません。しかし継続が進むほど、宇宙はもっと充実して展開するのである。結果として有機的世界もまた、継続の進行に比例して、さらに充満した広がりを実現し、宇宙のさらに大きな部分を表すようになる。(中略) その一方で、有機物の世界において遠くまでさかのぼれば、その分だけその有機物が己自身の中に内包する宇宙に占める部分は小さくなる。植物世界はその中で最も限られたものである。というのもその中においては、実に多くの自然過程がまったく欠けているからである<sup>1</sup>。

しかしこの新しい着想は、さらに大胆かつ明解な形で論考『人間的自由の本質』(1809)で述べられています。ここですら、新プラトン主義的な絶対者の痕跡は残っていますが、シェリングは神というものが決して「いる」のではなく、単に自然と歴史を通じて「ありつつある」のだという思いこみにこだわっています。

創造に最終的な到達点はあるのか？ そしてもしそうなら、なぜそれは一気に到達されないのか？ なぜ完成は最初から実現されないのか？ こうした質問に対しては、答は1つしかない。神は生命であり、単なる存在ではないからなのである。あらゆ

<sup>1</sup> *System of Transcendental Idealism* (1800), SW, I, Abt. 3, 492 邦訳『超越論的観念論の体系』；cf. またこうした同一性体系の形成を Bruno および *Further Expositions* (いずれも 1802) の対話として考察しよう。これらにおいてすら明らかな強調は二番目の着想にある。

る生命には宿命があり、苦しみと何かになる過程を持たざるを得ない。つまり神は、神自身の自由意志により己をそうした苦しみや生成過程にあわせたのである。(中略) 存在は、それになる過程があつてのみ筋が通ったものとなる。確かに、そうした存在になること自体には、それになる過程は存在しない。後者においては、それ自体が永遠として提示されているのである。しかしながら、対立を通じた(存在の)実現においては必然的になる過程が存在する。人間敵に苦しむ神の発想—過去の謎や霊的宗教すべてに共通する発想—なくしては、歴史はまったく理解不能となる<sup>2</sup>。

しかし充満の原理は、少し条件つきではありますが、アベラール、ブルーノ、スピノザの宇宙的な決定論とともに、再びシェリングによって追認されています。シェリングによればそれが必要な理由は一まだディオニシウスとスコラ哲学者たちの用語を使っていますが—「神の自己顕示の行為はその善と愛に関連しているから」なのです。しかしそれでも、いやそれだからこそなおさら、「神の性質からすべてが絶対的必然性をもって従い出てきて、それによって可能なことすべては現実的でなくてはならず、現実的でないものは同時に道徳的に不可能でなくてはならない。スピノザ主義のまちがいは、そうした神における排除しがたい必然性を主張したことにあつたのではまったくない。単に、この必然性を何か生命を欠いた非人格的なものと考えたことにあつたのである」。スピノザ主義は単に「盲目的で機械的な必然性」を認めただけなのでした。しかし「もし神が本質的に愛と善性であるなら、神の中で道徳的に必然であるものは真に形而上学的な必然性を持って従い出てくるのである」。

これに対してライプニッツは、可能な複数の世界の間選択権を与えた点で、まったくまちがっているのだとシェリングは言います。そこでのライプニッツは「神が自分自身と相談を行い」その相談の結論が出ると、無数の可能性の中からたった1つだけ実現させると決めるのだ、と主張しているのです<sup>3</sup>。こんな自由な選択を想定するというのは、「神が、あらゆる条件を考慮したときに、可能であつたものよりも完璧さで劣る世界を選び、そして—どんなバカげたことであれ、だれかしら主張する人はいるものなので、一部の人が本気で主張するように—神はもし望んだのであれば、この世界よりもよいものを作れたのだ、などということ」を含意するように思えてしまうのです(ちなみにご記憶でしょうが、これははるか昔にアベラールがバカげたことと宣言した説でした)。このようにして、可能世界の複数性などはいまも昔も存在しなかった、というわけですね。

確かに世界プロセスの始まりには混沌状態がありました。これは第一根拠/根底(Grund)の最初の動きを成すものであり「まだ未形成ではあるがあらゆる形態を受け取る能力を持つ物質」で、したがってその時点では未だに実現されない「無限の可能性」がありました。「しかしこの第一根底は神に吸収されるものではない。そして神は、完成されたものであ

<sup>2</sup> Op. cit., in *Schellings Werke*, herausg. von A. Weiss (1907), III, 499.

<sup>3</sup> シェリングの解釈を正当化しそうな下りがあるにも関わらず、これがライプニッツの本当の立場ではないことはすでに見た通り。

るが故に、1つのことしか意志できないのである」「可能な世界は1つしかない。なぜなら神は1つしかないからである」<sup>4</sup>。しかしその唯一の可能な世界は、本当に可能だったもののすべてを含むしかないのです。

つまり「神」はこの下りにおいてすら、まだ異世界的な属性をある程度は維持しており、あらゆる可能な生物をつくり出す必要性は未だに流出主義の弁証法に密接に類似した議論から導き出されています。神は原根底 (*Urgrund*) ではないし、原根底がますます多様な形態を生み出してやがては人間の中の自意識を生み出すプロセスの最終結末でもありません。神はここ、世界に先立つ完成であり、それなのにその本質的な性質の必然的な論理的結果として、この世界から生み出されるものでもあるのです。しかしながら生成は徐々に段階的に起こるものです。そしてシェリングが本気で、神は「生命」でありしたがって「苦しみと何かになる過程を持つ」という熱烈な主張を述べていたのであれば、自分の自己顕現のあらわれである世界プロセスに本当には参加しない超越的な絶対者という着想を、これに対して一貫性をもって併存させることはできません。二つの新学派まだ肩を並べて続いています。しかし一方は生き延びている状態であり、もう片方は前者を破壊する寸前まできている、革新的なアイデアなのです。シェリングの友人にして弟子、自然学者オーケンは、1810年の *Lehrbuch der Naturphilosophie* (自然哲学教科書) で、多少の追加や変奏を加えつつもほぼ同じ着想を同時期に提起しています。「自然の哲学は、神のこの世界への永遠の変身についての科学なのである」

自然の哲学は、原初の無からの世界の進化フェーズを示すという任務を負っている。天体や元素がどのように現れたかもしめす。それらがどのように高次の形態となり、ついに生命体があらわれ、人間の中で理性を得たか。こうしたフェーズは、宇宙生成史を構成する。(中略) 自然哲学は最も包括的な意味で宇宙生成論、あるいはモーゼの言う創世記なのである<sup>5</sup>。

これを見るとわかりますが、オーケンはここで、神というのを世界にある意味で先行する存在として語っています。宇宙に変身する絶対存在なのです。実のところ、彼の形而上学的な用語法にも、流出論の言語の名残が見られます。しかしオーケンにあって、それらはシェリングよりもさらに退行しています。というのもこの先行する絶対存在は、最も文句なしに否定的な用語で表現されているからです。時間の中で自己進化する存在という以外には、オーケンによれば神 = ゼロ、あるいは純粋な無です。もちろんあらゆる数字はゼロに含まれているとは言えます。というのもあらゆる数字は *determinations of zero* として表現できるからです。したがってあらゆる存在は神の中にあらかじめ存在すると言えるかもしれません。しかしそうした万物が存在するのは「現実としてではなく理念/アイデアの形

<sup>4</sup> Op. cit., in *Schellings Werke*, ed. Weiss, III, 493-494.

<sup>5</sup> オーケンの形而上学的進化主義が彼にとっては自然の下降を通じた種の変換の理論を意味していたかどうかは明らかではない。

で存在し、*actu* ではなく *potentia* としてのみ存在する」<sup>6</sup>。そして神の実現 (*Realwerden*) は次第に、コスモスの歴史を通じてのみ起こるといえるのです。その主要な権限と普遍的条件は時間です。「時間は絶対存在そのもの以外の何物でもない」「絶対存在は時間の中にあるのではなく、時間の前にあるのでもなく、時間なのである」。さらに「時間は単に神の能動的な思考なのである」。「それはあらゆる個別を含む不変であり、したがってあらゆる個別のものは時間の中にあり、創造された時間と被創造物の一つなのである」<sup>7</sup>。この絶対存在の時間的 *Realwerdung* (実現) が頂点に達するのは人間においてです。人間は自意識が持てる存在なのです。「人間は、その中において神が完全に己自身にとっての客体となる被創造物なのである。人間は神により表象された神なのである。神は自意識の中に神を表象している人間なのである。(中略) 人は完全に顕現された神、*der ganz erschienene Gott* なのである」<sup>8</sup>

こうした、神学における過激進化主義に近いものの初期の表現は、決して見過ごしにはされませんでした。そしてそれを糾弾したのは、20 年前にはドイツロマン主義運動の若き指導者たちにより、特別な崇拜と畏敬をもって遇されていた人物でした。F・H・ヤコービは 1812 年に *Von den göttlichen Dingen und ihrer Offenbarung* (聖なるものとその顕示) という論説を発表しましたが、その大半はこの新しい考え方に対する熾烈な、そして (シェリングが後に評した表現では) 涙ぐましい攻撃に費やされていたのです。シェリングがあげた問題の中に、ヤコービは宗教の哲学すべてに、最も深奥にまで達するアンチテーゼを見て取ったのでした。彼はこう書いています。「哲学者には大きくわけて 2 種類しかいない。より完全なるもの (*Vollkommnere*) が、次第に完全さの低いものから徐々に導出されたと考える者たちと、最も完璧な存在が最初にあり、万物の源その存在に持っているのだ、と考える者たちである。後者は、万物の第一原理は道徳的な存在であり、叡智を持って意志し行動する存在—創造神であると考え」。ヤコービの反論はとりとめがなく、教条的です。しかしながら、形而上学の自明かつ根本的な公理だと考えるものについて、明確な立場を述べています。つまり、何か「無からくる」ことはなく、優れたものが劣ったものに「生み出される」こともない、ということです。シェリングがごとき哲学は、形式論理の法則に真っ向から矛盾している、とヤコービは主張します。というのもヤコービによれば—プラトン主義神学ではありがちな主張ですが—一神と世界との関係は、いろいろありますが、論理的な *prius* (先立つ存在)、その結果に対する *Beweisgrund* (根拠) または理由であり、その結果の含意をそこから導出できるものなのです。しかし「常に必ず、*Beweisgrund* (根拠) はそれを使って証明されるべきものより上になくなくてはならず、後者をその中に吸収するものでなくてはならない。真理と確実性が発されるのは *Beweisgrund* (根拠) を通じてなので

<sup>6</sup> *Lehrbuch der Naturphilosophie*, I, 4.

<sup>7</sup> *Ibid.*, 22. ここにはまちがいなく、ベルグソンの *lempscrateur* の元型がある。もちろんそう言ったからといって、ベルグソン氏がこの着想を直接オーケンから引き出したと含意するつもりはない。

<sup>8</sup> *Ibid.*, 26.

ありその真理と確実性を受け取る存在は、その **Beweisgrund** (根拠) を手段として実証されるのである。その **Beweisgrund** (根拠) から下位のものはその現実を拝借するのである」

この攻撃に対してシェリングは、毀誉褒貶の激しい著作で応えました。その著作は、その熾烈さと、少なくとも当時の人々から見て批判者の哲学的な評判に与えた被害のためにもてはやされていますね<sup>9</sup>。しかしここで重要なのは、この攻撃によりシェリングが、その神学的進化論を大人しくさせるどころか、むしろ以前にも増して過激で、さらに留保なしに近い表現を使うようになったということです。彼はこの批判に対し、それまでの自著の中で「絶対的同一性」の無限性、無時間性、自己充足性が認識されている部分を示すだけでもよかったはずですが。しかし彼は、それができる地点からあまりに遠ざかってしまっていたので、いまやほとんど疑問の余地のない形でそんな着想を糾弾し、そんな「絶対的存在」が宗教の神になれるということを、きわめて明確に否定します。シェリングは、この問題についてのヤコービの論理構築やその哲学的重要性に関する自分の見立てについては、反対しません。また自分のドクトリンについての批判者たちによるまとめにも反駁はしません。シェリングによれば、このドクトリンの意味を適切に理解するためには、ある区別をしておくことが必要なのです。たとえば、この見解を抱く人々は、「より完全なものは、己とは独立してちがっている完全さが劣る存在から生まれ出た」とは主張しておらず、単に「より完全なものは、己の完全でない状態から台頭した」と述べただけなのだと言います。また同様に彼らは、ある意味で「全く完璧な存在—他のあるものの完全性を己自身の中に持っている存在—はあらゆるもの以前に存在しなくてはならない」ということを否定などしていません。しかしながら、それが事前に単なる可能性 (**potentia**) として存在したにとどまらず完全な実在物 (**actu**) として存在した、という主張は確かに否定しているのだ、とシェリングは述べます。「それが実在物として事前に存在したと信じるのが困難な理由はたくさんあるが、まず何よりも、それが最高の完成[または完全性]を実際に保有していたなら、実に多くの他のものを創造し生み出す根拠/根底 (**Grund**) などないというきわめて単純な理由が挙げられる。それ以上の高い完成度に到達することはできない以上、そうした被創造物を通じて、その存在は低い完成度に転落するしかできないことになってしまう」<sup>10</sup>。ここには、流出主義の論理に内在する中心的な矛盾—しかし何世紀にもわたりしつこく無視されてきたもの—がこれ以上ないほど鋭利に指摘されています。すると、もしそんなものにこだわるのであれば、展開するはずの各種の進化の約束や潜在力は、最初からあらかじめ存在していたと言えるかもしれません。しかしそれは、果たされぬ約束であり、実現されぬ潜在力なのです。

私は神を、最初にして最後、アルファにしてオメガとして提出する。しかしアル

<sup>9</sup> *Denkmal der Schrift von den gottlichen Dingen*, 1812.

<sup>10</sup> *Op. cit.*, SW, I, Abt. 8, 64.

ファとしての神は、オメガとしての神とはちがう。そして彼が唯一のものである以上—「卓越した意味」での神である以上—彼はもう片方の神にはなれず、同じ意味または同じ厳密性で神とは呼べない。というのもその場合には、はっきり言うておくと、進化していない (*urumtfaltete*) 神、*Deus implicitus* (暗黙の神) はすでに、オメガとして *Deus explitus* (明示的な神) であるものになっているからである<sup>11</sup>。

ヤコービの反対に直面したシェリングは、どのような根拠でこの進化的な神学を正当化するのでしょうか？ まずは、それが私たちの経験世界の実際の特徴、私たちの日々の観察と、自然科学のさらに包括的な視線に明かされる特徴と整合している、という根拠に基づいています。表面的に見ると、世界はまさに、高次のものがしょっちゅう低次のものから発達してくる系です。空疎な存在からもっと充実した存在が出てくるのです。子どもは大人へと成長し、無知な者は学識ある者になります。「さらに言うまでもなく自然そのものも、この主題について必要な馴染みを持っている者ならすべて知っているように、もっと卑小で未発達な生物を生み出していた状態から、もっと完全でもっとしっかり形成されたものを生み出す状態へと次第に台頭していったのである」<sup>12</sup>。目の前で絶えず起こり続けているプロセスは、ヤコービがそれをこじつけようとしているような、知覚不能性などでは絶対にあり得ないのです。この新しい哲学は単に、物事やその存在の秩序の一般的または「究極」の性質を、私たちがなじんでいるあらゆる個別のものについて知られている性質や順序に照らし、解釈しただけなのです。ヤコービの擁護する「普通神学 (*ordinary theism*)」はそれとは正反対に「自然と切り離された神および神の存在しない自然 (*ein unnatürlicher Gott und eine gottlose Natur*)」<sup>13</sup>をもたらした、というのです。

ここでもシェリングは、邪悪の存在という事実、世界の不完全性は、宇宙が完全で知的な第一原理 (*ab initio*) から導出されたという信念と相容れないと述べています。そうした信念を抱いている者は「これほど明瞭にして明晰な知性から、この世ほどすさまじく混乱した (ある程度の秩序がもたらされたときですら) 全体が生じ得たのか、と尋ねられると答えられないのである」。つまりあらゆる面で、シェリングは各種事実と整合する現実の図式は、大なり小なり混乱して問題だらけの、より十全で高い生命に向かう上昇というものなのだ、と考えるわけです。そして神の着想として認められる唯一のものは、この図式と調和したものである、というわけですね。

またそれに対立する見方は、宗教的に啓発され気を静めるような性質があると自称するが、そんなものはないのであると彼は宣言します。というのもそれは「非善を善から導き、神を善の源および潜在性にするのではなく、非善の源および潜在性にする」からなのです。

---

<sup>11</sup> *Op. cit.*, 81.

<sup>12</sup> *Ibid.*, 63.

<sup>13</sup> *Op. cit.*, SW, I, Abt. 8, 70.



それはできあがりつつある善、als ein ins Gute Verwandelbares (善なるものに変えることのできるもの)として受胎—絶対存在過程 (absolute becoming) の神学でと同じく、これは受胎されるものなのです) されているため、邪悪や不完全性それ自体は、絶望的で無意味な現実のかけらではありません。もしそれが、善なるものが崩壊しつつあるものとして受胎したのであれば、すでに実現した完成からの墮落として受胎したのであれば、邪悪や不完全性は、絶望的で無意味になってしまいます。さらに古い神学すべての神は、永遠に完全な神、シェリングの表現では「一気にすでに出来あがっている」神なのです。しかしこれほど不毛で無益な受胎はありません。というのもそれはまさに「死んだ神」の着想であり、自然の中や人間の中で生きて苦闘する神ではあり得ません。生命が死から、存在が不在から、低次から高次が生まれ出るなどということは考えられない、とヤコービは宣言しました。それに対してシェリングは問いかけます。それでは死が生から生まれ出ると考えるほうが容易なのか？ 「死の神ではない神を動かして死を生み出させるのは、生きたもの以外に何があるだろうか。生命が己を失って死に移行するというよりはるかに考えやすいのは、死—それは絶対的な死ではなく、生がその中に秘めていた死でしかない—から生が生まれ出るということである」<sup>14</sup>

しかしヤコービの誤謬は—シェリングによれば—彼がついぞ完全に蒙を啓かれることがなかった、古い哲学の論理的ドクトリンの自然な結果なのです。実際それは、ヴォルフ的な知識の理論を受け入れた形而上学の有害な結果の、見事なお手本なのでした。その理論はすべてを論理的な同一性原理に基づかせ、あらゆる確実な判断を「分析的」と見なすものなのです。シェリングによれば—必ずしも歴史的に十分正確というわけではありませんが—「あらゆる証明は単に同一の前提を進めたものにすぎず、ある真理から別の真理へは進歩などなく、同じものから同じものへと進んでいるだけとされる。知識の木は決して花開くことも実をつけることもない。どこにも何も発展などないのである」。しかし真の哲学と真の客観的科学は、トートロジーを唱えるだけなどではないのです。その対象は常に具体的で生きるモノなのです。そしてその進歩と発展は、そのモノ自体の進歩であり発展なのです。「哲学の正しい手法は、上昇するものであり、下降するものではない」。そしてその真の公理は、ヤコービが言明したインチキ公理とはまさに正反対なのだ、とシェリングは述べます。

発展が進み出てくる源となるもの (*der Entwicklungsgrund*) は常に必ずその発達して生じるものよりも低次なのである。前者は、後者を自分自身よりも高く持ち上げ、己をそれに従属させる。その後者の発展のための物質、器官、条件として奉仕するのである。

---

<sup>14</sup> Ibid., 77.

歴史研究者にはあまりに軽視されてきたことですが、この過激進化主義の形而上学および神学への導入、および論理の原理すら海底してそれを現実の進化的な着想と整合させようとする試みの中にこそ、シェリングの歴史的な意義のほとんどが存在しているのです。ヤコービとの論争における問題というのは、彼が明確に認識して熱烈に主張したように、あらゆる哲学的な問題の中で最も根本的かつ重大なものの一つなのです。それは、他の多くの理論的な問題の関連という面からもそうだし、また宗教意識に与えた影響という意味でも重大なのです。シェリングのテーゼは、理性神学や形而上学における最も尊重され、もっとも普遍的に近く受け入れられた公理を捨て去るにとどまらず、宗教的な気分のまったく新しい雰囲気と気質の台頭を意味するものだったのです。

しかしシェリング自身にとっては、この作りかけの神というドクトリンの意味合いは、単なるおめでたい進化的改善論などではあり得ませんでした。世界の進歩、神のゆるやかな顕現あるいは自己実現は、反対するものに対する闘争なのです。存在のあらゆる可能性は、すべて一度に実現されたわけではなく、まだ実現されていないので、物事の当初の性質の中には何かの阻害、何かの劣化の原理があり、それが克服される運命にはあるのですが、しかし苦闘と一時的な敗北も当然ともなうのです。生命力は一ロビネットが述べたように一ヨタヨタと試行錯誤によって進むのです。宇宙と人間の歴史には悲しい要素があります。世界過程は *ein Wechselspiel von Hemmen und von Streben* (障害と苦闘の相互作用) なのです。この着想をシェリングはすでにその若々しい詩 *Das epikureische Glaubensbekenntnis Heinz, Wiederporstens* (ハインツ・ヴィーダーポルシュトのエピキュロスの信仰) で述べております。この詩はロイス『現代哲学の精神』での見事な部分訳で知られていますね\*15。

このようにして、ついにプラトン主義的な宇宙の仕組みは、ひっくり返ってしまいました。もともとは完全かつ不変だった存在の連鎖は、生成過程 (Becoming) に変換されてしまいました。そこではあらゆる正当な可能性は、次々に度合いを増して実現される運命にあるのですが、しかしそれは時間の中で野莫大で緩慢な展開を通じてのみ起こるのです。そしてそれだけではありません。いまや神自身がこの生成過程 (Becoming) の中に置かれてしまうか、同一視されてしまうようになってしまいました。可能な存在の多様性の幅を定義づける観念 (イデア) の世界は、明らかに単に実現を待つだけの可能性の領域になってしまいました。そうした可能性は、それが実現されるまでは空疎であり無価値なのです。そして、イデアのイデア (観念の観念) ですら、もはやこの地位から除外はされていないのです。世界生成プロセスは、てっぺんではなく底から始まるものとなりました。底辺とはつまり、無限の生産力がその能力の限界に達したとされる、可能性の果て (ダンテの言う *ultime potenze*) です。そこではもはや「下りる道」はありませんが、まだ「上がる道」はあるのです。

しかしプラトン主義的な物事の仕組みの逆転、特に『ティマイオス』の中とプロティノスが想定した生成の順番の逆転は、存在の尺度を抽象的な理念的仕組みに変えてしまうものではありませんでしたが、その本質的な性格を変えるものではありませんでした。これまで振り返ってきた、古くからの観念複合体の要素は、シェリングの進化主義的形而上学でも強力なままです。癒しがたい生成性、多様性をつくり出す傾向、存在の最大の可能な「充満性を実現する必要性—こうしたプラトン主義世界の属性は、まだロマン主義哲学者の世界の属性でもあるのです。しかし生成性は、いまや不充足性が、無意識のうちにもっと豊かで様々な存在になろうと苦闘する話になりました。そして充満性は、永続的な性質ではなく、モノの全体の果てしない目標となったのです。

\* \* \*

これまで見てきた、この長い長い一連の「プラトンへの註釈」の歴史的な結末は、その成り行きからして、論理的に避けがたい結果でもありました。彼の哲学のこの段階において、シェリングの理由づけについて他に何を言うにしても、彼は少なくともプラトン主義の二つの潮流について、その両者が本質的に相容れないことを明示的に示すことで、そのどちらかを選ばずにはいられないのだ、ということを示しました。彼は、それに先立つ1世紀の形而上学に、選択肢を無理矢理突きつけたのです—とはいえその後継者の多くはそれを認識できなかったり、それを巧みに回避しようとしたりはしましたが。プラトンやプロティノスの二つの神は、両方同時に信じることはできないのです。そしてこの神学的な着想のそれぞれに関連づけられた、二つの価値体系は、理論的にも実践面でも折り合いをつけることはできないのです。世俗/時間的で不完全な生き物の世界の存在が、それ自体としてまともな善なのだ想定するのであれば、異世界的な善のイデア/観念はまがいものの善の観念でなくてはなりません。そして自己充足し永遠に完璧で完全な絶対存在は、世俗/時間的な存在過程および変更と創造的進歩の世界に関連してそこに顕現する神とは同一視できないのです。

こうした命題は、私たちのいる現代なら、自明だし言うだけバカげたものだと思う人もいるでしょう。またパラドックスじみた根拠レスなものだと思う人もいるでしょうね。それらがなぜ受け入れられたかという理由は、確かに、この講義では完全に説明されたわけではありません。そうした理由の一部は、これまでふりかえってきた思想史のフェーズの分析において、繰り返し示唆されてきたのではあります。しかしここでは、こうした議論の歴史的な考察だけでよしとせねばなりません。私が述べてきた物語の、哲学的な教訓の一つは、たぶんこの物語の成り行きそのものにより、明確に示唆されていると思うのです。(訳者の心の声：えー、そんなあ。その理由や教訓は、こんなほのめかしじゃなくて、もっと明示してくださいよー)

しかしながらこれは、ある観念の命運の歴史で示唆される唯一の教訓ではありません。もう一つあって、これにまったく触れないわけにはいかないでしょう。充満性と連続性の原理は、この歴史が示すように、通常は根底に置かれて、その上に明示的にせよ暗黙にせよ、宇宙が理性的な秩序であり、その構成には何も恣意的だったり運任せだったりデタラメだったりするものはないという信念が構築されています。このうち充満の原理は（それを改めて今一度繰り返しておく）世界の存在についてのみならず、その性質すべて、そこに含まれるあらゆる種類の存在について一厳密に言えばさらには、あらゆる個別の存在について一究極の理由、自明で「充足した」理由がなくてはならない、と想定しているのです。そしてその第一の原理から導かれる第 2 の原理は同様に第一の原理に続くものでもあります。自然には突然の「飛躍」などありません。物事は無限に種類があるので、それは絶対的に滑らかな連続性を形成し、そこにはあらゆるところに連続性を渴望する私たちの理性を困惑させるような断絶は一切ないのです。

そうであるなら、プラトンの「なぜ？」という問いも正当に尋ねられるし、満足いく形で答えられます。私たちの知性はまちがいがなくあまりに限られすぎており、存在のあらゆる細部について、この質問への具体的な答は出せませんが、一貫性ある回答すべてに本質的な、広範な原理を認識することはできるからです。西洋哲学および科学の大半は—おそらく、繰り返される強力な逆行する傾向があっても大半は—、私たちの住む世界に持つ理性/合理性へのこの種の信仰により、何世紀にもわたり動かされ導かれてきたのです。しかしこうした信念の持つ意味合いは、めったに完全に理解されることはなく、一般の認識にはきわめて緩慢にしかのぼってきませんでした。その集大成は、17 世紀の二つの偉大な合理主義/理性主義的な存在論と、もっと一般的な形では、18 世紀のお決まりの楽観論支持の議論で見えてきましたね。それらが明確にしたとおり、厳密に理性的/合理的な世界は、ウィリアム・ジェームズの表現では、最も厳しい意味での「ブロック世界」でなければなりません。「必然の真実」によって物事の仕組みが徹底的に一気に決まるというものです。最終的には、条件付きの事実などなく、未確定の選択肢などいまもこれまでもないのです。すべては必然的にそこにある「存在」の存在とあまりにガチガチにしばりつけられていて、その「存在」のほうも逆にその他すべての存在をギチギチに示唆するものとなり、おかげでその全体は、考えられる追加や欠如や変更を一切認められないものとなるのです。

世界がこのような形で着想されている限りにおいては、一貫性ある、明るい、知的にしっかりして頼れる世界に思えるし、その中では人の精神は、物事の理解を求めるという活動を自信たっぷりに進めることができます。そして実証的な科学は、事実が最終的には従うべき根本的原理と事前にあらかじめなじんでおり、宇宙の全体的なパターンについて一種の図式を与えられていたので、予期すべきことの概略がわかり、実際の観測によって個別に何が解明されるかすら予想できたのです。そして、何が存在するかという信念についての信念も、これほどすべてを覆う仮説なしには折り合いをつけられなかったことでしょ

う。充満性と連続性の原理は、その信念の正当な結果なのでした。もし論理的には等しく可能で、共存できるはずの2種類の生物があって、その片方が除外されていたら(訳注：つまり実在しなければ)、あるいは自然の空間的、数値的な規模がなにか一つの有限の規模や数で限定されているなら、明らかに存在の究極的な構成においては、何か恣意的で運任せの要因があるということになります—その要因が神の意志として述べられたとしても、そうなってしまいます。なぜなら、そんな意志はライブニッツが述べたように、完全に理性には左右されていないことになるからです。そして、それがそのように完全に左右されていないことを認めてしまうなら、そうした恣意性と条件の広がりはず想像不可能となります。

まちがいなく、一部の存在は何らかの意味では他よりも価値が高いでしょう。これは段階性の原理が示唆する通りです。しかし唯一の完璧な存在という水準の下では、その序列をある点ではなく別の点で止めるというのは、単なる気まぐれ行為でしかありません。そして *continuum formarum* (形態の連続性) も同じです。もし自然が「跳躍する」なら、その跳躍に根拠があるはずはありません。既存の形態の序列の中にギャップがあったり、本当に欠けたつながり(ミッシングリンク)があったりするなら、つまりたとえば、ある種の動物が存在するのに、その最も近い類似の生物種の間、その中間に可能性としては存在する種類が、空白のまま未実現で広がっているとすれば、宇宙は秩序を欠いていると認めるしかなくなり、一種の一貫性欠如と気まぐれさを特徴としているのだと認めるしかなくなるのです。

しかしながら、存在の連鎖という観念の歴史は—その観念が、世界についての完全に理性的な理解可能性を前提としていた限りにおいて—失敗の歴史でした。もっと厳密かつ公正に言えば、それは多くの偉大あるいは劣った精神により何世紀にもわたり継続された思考実験の記録であり、それはいまや示唆的ながらも否定的な結果が出たことがわかるのです。

この実験は、全体として見れば、人間知性の最も壮大な事業の一つです。しかしこの最もつこくもっとも包括的な仮説の帰結がますます明示的になってくると、その困難もますますあらわになってきました。そしてそれを全面的に展開してみると、宇宙の絶対理性という仮説は信じられないものだということが示されてしまったのでした。

その仮説はそもそも、多くの個別事実はもとより、1つの大きな事実と整合しないのです—私たちの経験する存在が世俗的(時間的)だ、という事実です。時間と変化の世界は、存在というものが、存在の論理そのものに内在する「永遠」で「必然的」な真理の系の表現であり結果なのだ、という想定からは導けないし、またそれと折り合いもつけられません。そんな系は、静的で一定の世界としてしか顕現できないのに、経験的な現実も静的で一定ではないから、プラトンの言う「イメージ」は想定されている「モデル」とは対応せず、したがってそれによって説明もできないのです。ある時点の自然が、別の時点で含んでいるのとは別のものや、もっと多くのものを含むようになる変化はすべて、充満理性の原理

(それを最もよく理解し最も熱心にそれを信じていた哲学者にとっての、その原理の意味あり) にとって致命的なんです。

さらに時間的な継続は、始まりがあるのか、あるいはないのか。そのプロセスに始まりがあるなら、その開始日と、それ以前の時代からどのくらい続いているのかという時間的なスパンは、恣意的な事実となります。世界がいきなりびよんと（どんな粗雑な形であれ）存在するようになったのが、ある時点でなくてはならず、それ以前の時点であってはいけない理性的な根拠は、まったく考えられないのです。そしてそれが、ある特定の期間的な長さを持つべき理由もまったくありません。神学的な形では、これはアウグスティヌスや、その他多くの形而上学者や神学者が格闘した困難です。もし生成的であり、世界を創造するのが神の性質や本質であるなら、そうした永遠の本質は何か時間の中のある特定の日に創造を開始することで存在を始めたはずはない—その日が紀元前4004年だろうとはるかに昔だろうと—ということなんです。その本質が、時間の中の継続として己を表現すると想定できたとしても、その世俗的/時間的な対応物は、無限の継続でしかあり得ない。創造の開始というドクトリンに、教義上その他の理由で献身していた哲学者や神学者の中でも理性主義的だった者たちが、この問題への取り組みで見せた苦闘は、人間精神の創意工夫の驚異的な例を提供してくれます。しかしそれは、露骨なまでに相容れない命題 2 つで、何とか折り合いをつけようという不毛な苦闘だったのです。

ひょっとすると、世界がいきなり青天の霹靂のようにドカーンと存在するようになったのかもしれないね。しかしもしそうであるなら、それは論理的に同じくらい存在しなかったかもしれない世界でもあります。そしてそれはその意味で、すさまじい偶然なのであり、その背後にはなんら理性的な必然性はありません。その代替案であるアリストテレス的ドクトリン、「世界の永遠性」つまり過去の世俗プロセスの無限性を採用するなら、別の種類の困難が生じます。完成されたりへまをやらかしたりしたできごとの連なりが無限にあるというパラドックスです。つまり何もまったく変わらないという無限の瞬間という、露骨に経験に反することを想定するか、あるいは無数の変化があったのにそれがまともな価値の実現をまったく達成していないと想定せざるを得ないのです。後者の困難ははるか昔にロイスがこんな寓話で正確かつ茶目っ気をこめて表現されています。

「砂浜で砂を掘り、堤防を作るためにそれを運び去っている男を見て、どれほど大量の砂を運び去ったかを見て、その生産性を賞賛するようになれば、(中略) それでも己をしてその人物に尋ねせしめるであろう。『おお友よ、君はどれほど長くこの作業をしていたのか?』 そしてはるか永遠の昔からずっと砂を運び去っていたとその人物が答え、そして自分が実は宇宙の本質的な特徴なのだと答えたら、内面ではこっそりその人物のウソつきぶりを驚嘆するにとどまらず、こう言いたくもなるだろう。『それならそれでいいんだがね、友人よ、だがすると君ははるか昔から無限に怠

はっきりと存在の連鎖という着想を世俗化し、それを存在の充満性と多様性が着実に増える宇宙的な進歩のプログラムに変えようとするのを見てきた人々は、このように自然に—まちががなくこの困難を大なり小なり認識して—おおむね世界の歴史の絶対的な始まりを想定しました。そうすることで、彼らは歴史が別の種類の *reasonableness* を持っているのだと考えることができたのです。なぜなら現実には苦闘しているというのだと想定できるし、すでにながりの度合いにわたり、理性的な目標に向けて動き、存在の全体としての優秀性や価値を豊かにしようとしてきた、と想定できるからです。しかし彼らは同時に、それが実に長きにわたりその属性を保有していたはずだという意味での、その本質的な論理性を暗黙のうちに否定しました。たった数世紀前だか何百万もの千年紀前に始まり、その行進が向かったと想定されたその方向は、その含意により偶然のできごとでしかなかったということになります。その実際に起きた偶然は幸運なものだったと考えられるのですが。

しかしながらこれは、この歴史が示唆する第二の教訓の半分でしかありません。残り半分は主知性/理性というものが、完全であらゆる恣意性を排除したものとして受け取られると、それ自体が一種の不理智性になるということです。というのもそれは、それが併存しうる限りあらゆる可能性の完全な実現を意味するので、制限したり選択したりする原理をすべて排除してしまうからです。可能なものの領域は無限です。そして充満の原理は、十分な理性の原理の含意として見ると、その含意を考え抜いてみるならば、それが適用されるあらゆる分野において無限へと発散してしまうからなのです—無限の空間、無限の時間、無限の世界、無限に存在する生物種、無限の個別存在、さらにどんなに似ていてもあらゆる 2 つの存在の間には無限の種類が存在することにもなります。この論理をこのように完全に展開すると、人間の理性が直面してしまうのは、その理性が圧倒されるにとどまらず否定されてしまう世界です。というのもそれは、どうしようもない矛盾の世界だからです。だから—一例を挙げるなら—主知主義/理性主義的な前提の中に暗黙に含まれていた、形態の連続性という想定は、自分自身と相反するものでした。数学的連続性概念のパラドックス（現代数学はそれを解決したと述べていますが、私はどうしても納得できるものではないと思えません）以外にも、あらゆる事象についての質的連続性というのは言葉の矛盾です。どんな序列においても、新しい性質、別種のもの、その序列すべてに共通するものと、規模や度合いがちがっているだけではないものが生じると、その事実により連続性が破れます。そしてそこから、充満と連続の原理—後者は前者により含意されるはずではありますが—もまた相互に対立しているということになります。最大限の種類多様性を示すという意味で「充満」した宇宙は、主に「飛躍」だらけでなくてはなりません。あら

<sup>15</sup> *The Religious Aspect of Philosophy* (1885), 248-249.

ゆる点で、何かちがったものへの唐突な移行があり、無限に多様な「可能な」相違性の種類のすべての中から、どれが次にくるのかを決める、純粋に論理的な原理はないのです。

つまり具体的な存在物の世界というのは、本質の領域のありのままの転写などではないのです。そして、純粋論理を世俗的な形に翻訳したものでもないのです—それどころかそんな用語自体が、純粋論理の否定なのです。存在物の世界は、それがたまたま持っている特性や、内容の広がりや、多様性を持っているのです。それがどんなものになるか、可能な世界のどれだけがそこに含まれるべきか、などということ、はるか永遠の昔から事前に定めてきたような理性的/合理的な根拠など、ありはしません。つまり、存在する世界というのは要するに、条件付きの世界ではあります<sup>16</sup>。その規模、パターン、習慣、私たちが法則と呼ぶモノには、何か恣意的で特異なものがあります。しかし、もしそうでなければ、この世は特徴のない世界になり、無限の可能性の中で選好や選択の力もなくなってしまいます。もし神学者たちの伝統的な擬人化表現を使っていいなら、存在の世界では「意志」は「叡智」より先にあるのだ、とでも言えます。

この問題については神学における厳密な合理主義に対する中世晩期の反対者たち、ライプニッツやスピノザの18世紀の反対者、存在の連鎖という発想すべてに対するヴォルテールやジョンソン博士の反論のほうが、議論に勝っていたと認めねばなりません。形而上学理論としての充満の原理や連続性の原理、さらにそれに説得力の相当部分を与えた充足の原理は、結局はこのかつ論にたどりつくのです。私たちの歴史的なサーベイが終わった時点から、1世紀にわたる省察を経て、その結論はますます暗黙にも明示的にも主流となりました—あまりに主流になりすぎて、この問題がどれほど重要か、こうした正反対の思いこみが果たした歴史的役割や動機がいかに大きなものだったかという感覚が、かなり失われてしまったほどです。

その結果の一側面を如実に示すのは、ホワイトヘッド教授の一節です。これはまちがいでなく、プロティノスやブルーノやスピノザ、いやライプニッツすら震え上がらせたことでしょう。というのもそれは神という名を、流出説の無限の多産性に与えるのではなく「制約の原理」に与えているからです。ホワイトヘッド氏はこう書きます。「形而上学的な状況における一要素として言えるのは、こうした原理が必要だということである」「何か特定の『どのように』が必要であり、事実の問題における『何』の何らかの特定化が必要なのである」。さもないと、現実世界の「明らかな不合理な制約」はそれが純粋な幻影でしかないという証明としてしか理解できなくなってしまうから、なのだそうです。「もしこの代替案を拒絶するなら（中略）実体的活動の属性の中に屹立する制約の根拠を提示しなくてはならない。そうした属性は、何ら理由を提示できないような制約を示すものなのである。なぜならあらゆる理由/理性はそこから流出するものだからなのである。神こそは究極の制約

---

<sup>16</sup> 私は「条件付き」という言葉をその絶対的な意味で、スピノザが定義したように使う：  
*Res singulares voco contingentes, quatenus, dum ad earum solam essentiam attendimus, nihil invenimus, quod earum existentiam necessario ponat* (Eth., IV, Def. 3).



であり、神の存在こそは究極の不合理性なのである」<sup>17</sup>。このような、不合理の優位性の主張との対比、しかし一方ではその意図せざる裏付けを見ると、私たちが注目してきた観念複合体の歴史というものは、哲学的な精神が持つある種のしつこい渴望の表現という極めて痛々しい関心対象でもあり、また現代および後代における哲学的な思索について、それが永続的な示唆性をも持っているのです。

しかしながら—多くの歴史的な例が示すように—信念の効用とその正しさは独立変数なのです。そしてまちがった仮説はしばしば真実への道となります。したがって私としては、これらの講義を終えるにあたり、存在の連鎖という観念は、その前提や含意により、西洋思想の歴史において、多くの奇妙なほど嬉しい結果をもたらしてくれたという点について念を押しておきたいと思います。この観念がその歴史において果たした役割についての、長くしかし不十分な振り返りによって、少なくともその点は十分に明らかであることを望むものであります。

---

<sup>17</sup> *Science and the Modern World*, 249 (邦訳ホワイトヘッド『科学と近代世界』上田他訳、松籟社、1981). ちなみに留意すべき点として、同じ着想のいささか漠然とした説明がシェリングにある：*Denkmal der Schrift von den göttlichen Dingen*, ed. cit., 65.